「こうで……いいの、貴くん？」
「ああん。お尻が丸見えで、恥ずかしいよ」
千尋と瑞希は、言われた通りの格好をしながらも羞恥に頬を染める。
二つのヒップがピッタリと整列しているのを見て、貴幸は新たな興奮が湧きあがってくるのを隠せなかった。
いかにも女性らしいふくよかな千尋のヒップと、引き締まっていて中性的な印象もある瑞希のヒップ。どちらにも異なる魅力があり、これまた甲乙はつけがたい。
少年は、本能の求めるままに従姉のヒップをつかむと、下腹部にくっつきそうなくらいの強ばりを花弁に思いきり突き入れた。
「あふううんっ！　この格好ぉぉ！　激し……ああんっ、すごいっ！　貴くん、いいよおぉぉぉ！」
髪を振り乱し、激しく喘ぐ千尋。
何度かピストン運動をして、それから抜いてすぐに瑞希のクレヴァスへと一物を挿れる。
「はふううっ！　貴幸ぃ！　きゃううっ！　あんっ、あんっ、いいっ！　さっきより、いいいぃ！」
貴幸が腰を動かすと、ショートボブの髪の少女も甲高い悦びの声をあげた。

やはり、この体位のほうが正常位よりもはるかに移動しやすく、交互の挿入もスムーズにできる。

思う存分突けるようになって、少年は二人の少女をひたすら順番に貫きつづけた。

「ああ……いいなぁ。あさ美も、混ぜて欲しいなぁ」

三人の様子を見ながら、ようやく身体を起こしたツインテールの少女が間延びした声をあげ、羨ましそうに見つめる。

（これでも大変なのに、あさ美ちゃんまで加わったら冗談じゃないよ）

並んだ二人の片方を何度か突いて、それから抜いてもう片方に……というのを素早く繰りかえす行為は、一人に集中するより肉体にかかる負担が大きかった。おまけに、不公平にならないように気を遣っているため、精神面での消耗も激しい。

ここにもう一人増えたら、どう突いていいかわからなくなりそうだ。

と内心で冷や汗をかいたものの、幸いあさ美はまだ絶頂の余韻が抜けきっていないのか、羨ましそうにしながらもそれ以上の行動には出なかった。

「きゃああんっ、あさ美ちゃんに見られて……はううう、いいよぉ！」

ちょうど突き入れて腰を動かした途端に、瑞希が昂(たかぶ)った声をあげる。やはり彼女は、少し恥ずかしい思いをしたほうが肉体が敏感になるらしい。

「ああっ、貴くん、はううう、もう、もう、わたしぃぃっ！」

「貴幸、ひゃうううっ、あんっ、あたし、イッちゃいそう！」
さらに交互に突きつづけていると、少女たちの声のトーンが跳ねあがった。そろそろ、絶頂を迎えそうなのだろう。
貴幸のほうも頭が朦朧(もうろう)としてきて、いい加減に本日三度目の限界に達しそうだった。すでに、どちらに入れているのかを意識することもできず、ただ無我夢中で二人の少女に代わるがわるペニスを挿入しつづける。
「あっ、あっ、貴くんっ！　わたし、もうダメぇぇぇぇぇぇぇ!!」
千尋が絶頂の声をあげた瞬間、ペニスを包む膣肉が収縮をはじめた。
（ああ。今、ちー姉ちゃんに入れてたんだ）
そう思った瞬間に貴幸にも限界が訪れ、従姉の子宮に向かって精を放出する。
「あふううっ！　ザーメンいっぱい入ってくるぅ！」
と、千尋がとろけた表情を見せる。
だが、貴幸はこのままスペルマを出しつくしたいという思いを振り払い、いったん分身を抜き取った。そして、精を漏らしながら瑞希に突き入れる。
「きゃふっ、あんっ、あんっ、セーエキ入って……きゃうううぅぅぅぅん!!」
軽く腰を動かし、残った精液をしごくようにして注ぎこむと、幼なじみの少女も絶頂の声をあげて身体を強(こわ)ばらせた。

「貴くんのザーメンんんん……こぼれちゃダメぇ。出したくないのぉ」
「出てるぅ……けっこう、セーエキ出たよぉ……子宮が気持ちいいぃぃ」
つぶやくように言いながら、テーブルの上に突っ伏す千尋と瑞希。
（ううっ。俺も気持ちいいけど、疲れすぎて死にそう）
疲労困憊（ひろうこんぱい）した少年は、分身を抜くことも忘れて瑞希にグッタリともたれかかる。すると、少女の膣肉がペニスを離すまいとするかのように、しっかりとまとわりついてきた。